

イギリス人女性の見た文明開化期の日本 ——イザベラ・バード『日本奥地紀行』より読み解く——

01K078 山田朝子

はじめに

今の世の中、ある程度のお金さえあれば、私達はいろいろな国を旅することができる。そしてもう少し多くのお金があれば、一定期間だけでなく実際にその国に住むことだって可能だ。そういった面では世界は確実に小さく、身近な時代になってきている。しかし、身近になればなるほど、自身の訪れた国のイメージは、それまで自分が教わってきたものや、抱いていたものとはかけ離れていく場合が多い。

異文化に触れたとき、その国の中には捉えられないギャップを感じる。私は今回日本を訪れた外国人の視線から捉え、彼らがどんな目で日本を見ているのかを論じていきたい。彼らはいったい日本人の生活の中の何に、どんなギャップを感じ、また、どんなところに共感するのかを、特に無意識の中で起こる文化間のギャップに注目して論じていきたいと思う。

そして、このギャップを調べるにあたり、私が一番興味を持ったことは、現代よりも交通手段が発達していなくて、異国の文化の知識もほとんどなかった時代の人々が異文化と接したときの反応だ。彼らは生活習慣の違いや、言葉の違いなど、まったくの予備知識のない状態でどのように異文化と接していたのだろうか。きっと今よりも異文化に触れたときの衝撃は大きかったに違いない。もっと強力な文化的違いの中で起こるギャップを求めて、私は現代よりも一昔前の、まだ世界が今のように小さく、身近でなかった時代の人々の交流から、異文化間のギャップを見てゆきたい。

I 序論 対象人物と研究方法

今回、外国人の目から日本の文化を見る上で、対象となる外国人の持っている文化背景と、日本の文化とを両国の資料を使い比べることで、日本を訪れた外国人の感じたギャップの原因を探ってゆくことにしたい。そして、今回は対象となる人物も、国や性別ではなく、個人を選ぶことにした。その理由は、時代や社会的立場によってそれぞれの文化は全く異なり、同じ国、性別、社会的地位のもの同士でも、個人の持っている文化は育った環境などによって一人一人異なっていると考えられるからだ。そしてなにより、私が今回一番知りたいのは、先に述べたような「一般的な知識として知られている」文化ではなく、個人が個人として異文化に触れたときに感じる驚きや共感である。そのため、対象を一人に絞り、その人物個人の文化と生きてきた時代を通して、来日して受けた衝撃を読み解いてゆきたい。

今回選んだのは1878年、明治初期の日本に健康回復の手段として訪れたイギリス人女性の「イザベラ・バード(Isabella L. Bird)」である。彼女は同時代に来日しているアーネスト・サトウ⁽¹⁾のように英国の大使館で働いていた人物でもなければ、旅行家でもない。ごく普通の英国人女性だった。ただ、自らの健康回復のために日本を訪れたという人物が、自らの持っている母国の文化や一般的な知識から解放され、個人の体験とその感想を読み解いていくには彼女の

ような人物に迫るのが一番効果的であると考えた。そこで「イザベラ・バード」の書いた『日本奥地紀行』⁽²⁾を元に、彼女の目を通して日本、そして彼女自身の文化や人生も論じてゆく。

まずは、イザベラ・バード(Isabella L. Bird)のライフヒストリーについて述べたい。

1831年10月31日、バードはヨークシャーのバラブリッジにて父エドワード、母ドーラの間にもまれる。健康に恵まれない幼少期を経て、23歳(1854年)の時に、医師の勧めで、健康回復のため、アメリカ、カナダを訪れた。これを契機に、72歳(1904年)まで通算30年に至る世界各地への旅行を行なうこととなる。その中で、世界各地の辺地旅行記の出版などの功績が認められ、62歳(1893年)のときに、ヴィクトリア女王に謁見。英国地理学会の特別会員に選ばれる。その後もウラジオストックや朝鮮、満州、日本、中国西部などを旅し続け、1901年(70歳)に6ヶ月に渡りモロッコを旅行し、その3年後の1904年に病気のため死亡した。

バードの家庭環境を説明する。父エドワード・バードは、ケンブリッジ大学を卒業した後、当初インドのカルカッタで弁護士をしていたが、妻を失って帰国し、バラブリッジのオールドバラの牧師補となった。その時に、当時ヨークシャーでも名家のドーラ・ローソンと再婚。そしてイザベラが生まれた。母ドーラ・ローソンは現在も「裕福」な名家であるローソン家の七人兄弟の二番目の娘として生まれた。彼女の叔父の多くも牧師や宣教師などの「知識階級」だった。そのためか、少女時代のイザベラを教育したのはほとんど母親のドーラだった。

また、バードは父が聖職者だったため、幼い時から転々と居住地を変え、教会の中にいることで、知識人の大人の中で教育され、小さい頃から宗教的雰囲気の中で育ってきた。この幼い頃からの家庭環境が、バードが数々の旅行記を書くことに、またその中で見せる彼女の考え方に大きく影響を与えたと考える。

では次に、彼女の育ってきた環境を説明したい。まず1842年、バードが3歳の時、父エドワードが病弱なため、一家はチェシアのタッテンホールに移り住んだ。エドワードはこの地の教会の牧師を8年間務め、バードの妹ヘンリエッタがまもなく誕生した。姉妹は美しい田園の中で幼少時代を送った。病弱なバードは、戸外に親しみ、馬に乗る事を覚えた。

その後、1842年にエドワードがパーミンガムのセントトーマス教会の牧師になったので、一家はパーミンガムに移り住んだ。この教会でバードは11歳と幼いながらも教会の日曜学校で教えていた。エドワードはこの教会に6年間勤めたが、病気のために比較的閑静な環境を求め、今度はハンチンドンシャーのワイトン教会に移った。その後、父エドワードはその牧師館で親子四人と家政婦および牧師を含む八人の生活を送り64歳で病没(1857年)した。ワイトンでの父親の死後、家族三人でエジンバラに居住地を移した。

この様にバードは、幼い頃から数多くの地を移り住み、いろいろな地域を見て育った。そして自身も病弱な少女期を過ごし、19歳(1850年)の時に手術を受けたバードは、毎年夏にスコットランドで転地療養をした。その後、この転地療養が功を奏したのだろう、健康回復の手段として様々な国を訪れて、この論文で扱う『日本奥地紀行』をはじめ、様々な旅行記を書き始めることとなる。

バードの生きた時代は、イギリスの女王、ヴィクトリア(1819～1901)の治世下、いわゆるヴィクトリア時代に重なる。この時代はイギリスの国勢が絶頂にのぼりつめた時で、歴史の上で最も繁栄した時期であり、その繁栄をおびやかす不吉な影は、まだどこにも姿を見せておらず、文字通りの黄金時代だった。議会制民主主義が十分に根付いて、政治の近代化により世界列強のトップを直走っていた。世界で最初に行なった産業革命により工業は近代化し、生産力が飛

躍的に上がり、19世紀中ごろから後半にかけては「世界の工場」「世界の銀行」「世界の造船所」「世界の取引所」などの名で称えられる経済最先進国となった。この様に経済大国となったイギリスは世界の富を一手に集められるようになり、国内の情勢も落ち着いていた。革命などの騒乱もなく、人々は長い平和をも楽しむことができた。この様なイギリスの情勢は他国からも羨ましがられ、模範とされていた⁽³⁾。それだけこの時代のイギリスの豊かさは世界の先端を走っていたといえる。

しかし、どんなに華やかで、社会的流動性が増したこの時代であっても、中世イギリスの封建制度の下で出来上がり、世襲によって受け継がれる身分関係の「社会的階層」の区別は残り、階級差がなくなることはなかった。19世紀のイギリス社会は「上流階級」、「中流階級」、「労働者階級」の三つの階級からなる、史上まれに見る明快な三階級社会であった。

この三つの階級を説明すると、「上流階級」とは、主に大土地所有者で、イギリスの政治経済の中枢に位置し、区の牧師を選ぶ権利や自分の言いなりになる国会の議席の一つや二つくらいは手にしていた。「中流階級」とは、十分な富と積極的な姿勢があれば、「上流階級」に浸透する事が可能であった。そのためか、「中流階級」の人々の中には「上流階級」のライフスタイルを倣おうとするものが数多くいた。特に19世紀後半においては、産業革命による経済成長がこの階級の人々にかつてない豊かさと安定をもたらし、彼らの多彩で旺盛な消費生活と、対面を志向する文化が、社会と国家の動向を大きく左右するようになった。その中で、中流階級から出世を遂げて上流階級になる、あるいはそれが金銭的に難しければ、「上流階級」の外見だけでも真似ようと、召使の雇用が「中流階級」の端的なステイタス・シンボルとなった。この様なイギリスの豊かな国内情勢の恩恵を受けた「中流階級」に反し、絶えざる人口の増加と、工業化・都市化の進展によって、社会の下方に生み出された各種の肉体労働者が存在した。それが、「労働者階級」である。この階級に属する成人男性はもちろん、女性は農業労働から売春まで、子供は炭鉱や煙突掃除をして働くなど、過酷で非人間的な扱いをされていた⁽⁴⁾。

この様にイギリスの身分制度は、19世紀になっても、階級の名前の違いだけではなく実際に機能しており、同じ国であっても上層階級と、下層階級の生活水準は全く違い、持っている文化も全く違っていた。そのため、バードがイギリス人であっても、その中のどの階級に位置するかを把握していないと、彼女が日本で感じた気持ちの裏にあるものをしっかりと把握する事は難しい。そこで、次はバードの階級を見てゆきたい。先に述べたように、父は「弁護士・牧師」であった。これらの職業に属する者は、「中流階級」に位置する。しかし、彼女の母親は、父親の再婚相手ではあるが「名家」の出身であり、「上流階級」に位置していたと考えられる。バードの母親は、父親の家に嫁いできたのだから、父親の階級に当てはめて考えると、彼女は「中流階級」に当てはまる。しかし母親の実家が「上流階級」と言う事を考えると、「中流階級」の中でも「上流階級」に近いところに位置している恵まれた豊かな環境で育ったと思われる。バードが健康回復のためと世界各地を旅できたのも、牧師だった中流階級の父親ではなく、裕福な名家だった母親の財産力がそれを可能にしたのではないのだろうか。

この様な家庭環境で育ってきたバードが自らの旅行での体験を綴ったのが、『日本奥地紀行』である。この紀行文は1878年の4月、イザヘラ・バードが健康回復の手段として初めて日本を訪れた時のものだ。バードはおよそ五ヶ月かけて横浜、東京、日光、東北、北海道と日本の奥地を旅した。

1878年といえば、日本は明治11年。明治時代に入ったとはいえ、移動手段は馬、人々は着物

に下駄のスタイルというもので、江戸時代の文化が数多く残っていた。特に田舎に行けば行くほど生活は江戸時代そのものであった。そんな文明開化期の日本をバードはただ一人、案内人兼通訳として伊藤⁽⁵⁾という若者だけを連れて、日本を巡った。一人旅の外国婦人とあって旅行中土地の人々の好奇心の的となりながら、彼女は日光、新潟、米沢、秋田を経て北海道に渡り、当時日本人の間でも受け入れられていなかったアイヌ民族とも関わった。

『日本奥地紀行』は、こうした旅の出来事をバードが旅先から妹や、友人に送った手紙が元となっている。そのため、内容はとても個人的なもので、バード自身も本のはしがきに述べているように、読者も旅行者の立場に立つことができるし、旅の珍しさや楽しみはもちろんのこと、旅行中のいろいろな苦難や退屈まで、筆者とともに味わうことができ、個人の目に映った日本を調べることが可能だ。では、これからイザベラ・バードが『日本奥地紀行』で見せたりアクションを実際の彼女の育った文化と比較しながら読み解いてゆきたい。

II 本論

第一章 バードの比較の目

1. イギリス人としてのものの見方

バードは幼い頃から色々な地を転々とし、日本に来るまでにも、療養のためにと、アメリカやカナダ、ハワイを旅してきた。この経験から、バードが日本に来た時に、異文化を自分の文化といったん切り離して、客観的な目で見える人物になっていたら、その後の紀行文は個人的な感想のない、ただの状況報告になってしまっただろう。そこからは異文化に接した時に受ける違和感やギャップを読み解くことはできない。しかし、『日本奥地紀行』を読んでみると、まず日本に着いて通訳兼召使を募集し、選ぶというシーンで、彼女がイギリスの文化を持ったまま、それを日本でも通そうとしていることが見て取れる。

次の文は、イザベラ・バード『日本奥地紀行』から抜粋した文章である。以降は彼女の実際に書いた文章を引用しながら『日本奥地紀行』を読み解いてゆきたい。

まず、バードが通訳の面接をした感想を見てみよう。

三人だけ有望に思えた。一人は元気の良い青年で、明るい色のツイード地で仕立ての良い洋服でやってきた。カラーは折襟で、ネクタイにはダイヤ《?》のピンをつけ、白いシャツはのりの良くきいた硬いもので、ヨーロッパ風の浅いお辞儀すら身をかがめてできそうにもなかった。金メッキの時計鎖にはロケットをつけ、胸のポケットからは真っ白な上質カナキンのハンカチをのぞかせ、手にステッキとソフト帽を持つといういでたち。[中略]次はたいそうりっぱな顔つきの男で、年齢は三十一歳、良い和服を着ていた。彼はしっかりとした推薦状を持っており、彼の話す英語は、はじめのうちは期待が持てた。(『日本奥地紀行』第4信より。下線は筆者(以下同))

最終的にバードは自分の召使として、見た目だけでなく、技術と経験で伊藤という男を選ぶのだが、彼女が自分の召使の面接をする時、面接相手の服装と推薦状にとってもこだわっているように思える。この事を当時のイギリスの社会と合わせてみていくと、19世紀を迎える頃のイギリスでは、バードが属していた中産階級でも召使を雇えるくらいに裕福になっていた。体面を保つために、とにかく最低一人は召使を雇わざるを得ないという状況だった。そのため、当時のイギリス人にとって召使の存在はとても身近な、そしてなくてはならないものだった。実

際にバードの家でもワイトンに移り住んだ時に、家政婦を雇っていたので、バード本人も召使を身近に感じていたはずだ。

当時のイギリス人にとって、雇っている召使の立ち居振る舞いや外見は、雇い主の社会的地位を示す物差しとみなされ、階級が上流に行くほどその傾向が顕著になった。バードの父は元々弁護士で、その後牧師になったが、弁護士などの知的専門職は少なくとも召使を三人は雇うものと考えられていた。バードが面接の特に候補者たちの見た目をよく観察していたのも、こういったイギリスでの慣習があつての事だろう。推薦状を大切にしていたのも、ただでさえ危険な異国での女性の一人旅に、推薦状を持たないような信用できない男は選べないという考えは、イギリス人の召使に対するこだわりを反映しているように思われる。どこの馬の骨とも分からないような人物を採用するよりは、自らの旅の安全と体面のためにも、推薦状を持ったそれなりの地位の人物を選びたかったのかもしれない。

この様にバードの中には確かにイギリスの文化が存在し、彼女の日本での生活にも影響している。バードの比較の目を論じていくにあたり、比較の対象となる当時の日本とイギリスの文化に注目し、バードが異国の日本に感じた違和感を読み解く足がかりにしたい。

特に文化を見ていく上で大切な両国の「経済状況」「食」「生活用品」の三つに注目したい。

2. 当時の生活スタイル——「経済状況」「食」「生活用品」

はじめは「経済状況」である。産業革命により世界トップの経済力を誇っていたイギリスが、明治初期の日本よりも豊かだったのは当然だが、イギリスでは階級によって経済状況がかなり異なっていた。当時バードは健康回復の手段として数々の国を旅してきたのだが、現代の日本でも旅行に行くといえばある程度のお金が必要である。

当時のイギリスの上流階級は、産業革命により経済的に豊かになっていた。上流階級の暮らしが豊かになると、労働者達も豊かになり、休暇が増えるようになった。また、当時イギリスに起こった鉄道ブームによって、全国に張り巡らされた鉄道網は低コストで、大量に、そして早く人々を輸送する事ができ、この鉄道を利用する事で、休暇の増えた労働者階級までが日帰りや短期間の宿泊をとまなう行楽を経験できるようになった。旅行の内容は、バードの様に未開の土地に行くのではなく、もっぱら海岸のリゾート地だったが、娯楽や行楽を下層階級の人も楽しめる時代だったのだ⁽⁶⁾。

この様なイギリスの旅行事情を、御伊勢参りに行くために、村で貯金をして一年に一回、数人単位で順番に旅をしていた同じ時代の日本と比べると、下層階級でも鉄道を使った旅ができていたイギリスとの経済の差が良くわかる。

次は「食」の違いだ。現代でも食の違いで文化の違いをまざまざと思い知らされるという事が良くある。食文化の違いを把握する事で、当時のイギリスと日本の文化の違いの大きさがわかるだろう。

『日本奥地紀行』でバードの日本食についての感想の一部だ。

「日本食」というのはぞっとするような魚と野菜の料理で、少数の人だけがこれを飲み込んで消化できるのである。これも長く練習をつまなければできない。(『日本奥地紀行』第4信より)

「車夫達は足を洗い、口をゆすぎ、ご飯、漬物、塩魚、そしてぞっとするほど嫌なスープ(味噌汁)の食事をとった。(『日本奥地紀行』第6信より)

当時イギリスの中流階級の主婦達も、上流階級に憧れ、そのライフスタイルに倣おうとする動きがあった。それは「食」に関しても同じで、上流階級の人々が食べている凝った料理を中流階級である自分達も作りたいと思っていた。そんな人々の台所に、レンジにもオーブンにもなる革命的に進化したレンジが登場したのだ。これにより、中産階級の主婦達は、もっと凝った付け合せの料理、デザートやグレービーソースがあまり手間も掛からず、場所もとらずに作れるようになった⁽⁷⁾。

日本では、かまどで調理していた時代に、イギリスでは、一つのオーブンで様々な料理を作る事ができたのだ。食事の内容も、町人であれば、夕食は、大根のみそ汁と野菜の煮つけの一汁一菜。それに、たくわん、白米と麦を混ぜたご飯が普通であった。農民ともなると、もっと貧しい食事となり、主となるものは粟やひえなどの穀物類、そしてこれらに割れた米粒や大根やかぶ、大豆の葉などを加えて雑炊にして食べていたという非常に貧しいものであった。

魚に関しては、当時イギリスでは食品の保存方法がまだなかったので、魚は珍品で高価だった。そのため、内陸部に住んでいるイギリスの人々は、誰かが贈り物としてタラやヒラメなどを藁に包んで籠に入れて送ってでもくれなければ、海水魚などの味など知ることも無く、魚に縁がなかった⁽⁷⁾。このことから「長く練習をつまないと…」という感想がでてきたのだろう。日本がこれだけ貧しい食事をしてきた時代に、イギリスの中流家庭では、オーブンで作られたグレービーソースを使った食事を楽しんでいたのだ。そう考えると食事の作り方、素材、味付けに至るまで、全く違う国の食文化に対して見せたバードの反応の理由がわかってくる。

そして、バードが「ぞっとするほど嫌なスープ」と嫌っている味噌汁については、宮本常一著の『イザベラ・バードの「日本奥地紀行」を読む』によると、バードだけでなく外国人にとって味噌汁とはよっぽど嫌な食べ物だったようで、彼らは味噌汁だけでなく、漬物も嫌がった。この二つの食べ物を外国から来た旅行者たちが嫌がる原因の一つは匂いだった。当時の日本人にとって味噌汁は、ミネラルをとる手段として、生活の中でとても大切な食べ物とされていた。特にバードの旅した北関東から東北の地区では味噌汁の摂取量が非常に多く、間食にも味噌汁を飲むほどだった。この事も外国人であるバードに違和感を与えた原因の一つであるという⁽⁸⁾。

次に「生活用品」に注目してみよう。「生活用品」の使い方とその国の人々の文化や習慣も見えてくる。今回はバードが日本を回る際に準備をした道具に注目して見ていきたい。

準備は終わった。私の支度は、重さ110ポンドで伊藤の重さ90ポンドを合わせると、ふつうの日本の馬一頭がやっと運べる重量である。(『日本奥地紀行』第6信より)

バードは旅に出るにあたり、寄りかかるための折りたたみ椅子、人力車での旅行のための空気枕、毛布に、蚤を避けるための寝台、そしてゴム製の浴槽さえも運んで歩いた。こんな重装備は当時の日本人はもちろんしない。バード自身も、できるだけ日本の生活になれるように、他人から言われたよりずっと荷を減らしていた⁽⁸⁾。これはバードにとって冒険だったと思うが、寝台はもちろん、ゴム製の浴槽まで持ち歩いていたのには驚かされる。

寝台について、バードはたびたび書いているが、当時の日本には蚤がいたるところにいて、寝台で寝なければたちまち蚤の餌食になってしまうような状態だった。当時、蚤は家や畳の奥にとどまらず人のすまない山の中にも存在し、人々を悩ませていた。しかし、日本人の紀行文を読んでみると蚤の記述が無い。それはまさしくバードの母国イギリスと日本の違うところで、日本人にとって蚤のいる生活は当たり前のことで、外国人であるバードだからこそ特筆した部分であるといえる⁽⁸⁾。

バードは浴槽さえも運んでいる。当時のイギリスの浴室事情は、家庭では19世紀中ごろから給水設備と下水処理施設の改善がなされ、ガス管によって、水道水を温め、浴槽にお湯を張る事ができるようになっていた。裕福な家庭ではこの頃すでにシャワーも取り付けられ、入浴はイギリスのある程度の裕福な家ならば、生活の中に溶け込んでいた⁽⁷⁾。もちろん、中流階級のバードにとっても、入浴は無くてはならない生活の習慣の一部になっていたと考えられる。そもそも、イギリスでは何世紀も前から腰まで浸かる浴槽と素材はゴムではないが、移動式の浴槽があって、持ち運びできるシャワーも1478年頃から存在していた⁽⁷⁾。使い勝手はあまりよくなかったようだが、このようなシャワーがあったという事は、比較的簡単にバードの浴槽も準備できたのではないだろうか。移動式の家具は私達が考えているよりも身近かな存在だったのかもしれない。この様なイギリスの文化の中で生まれた便利な道具の存在が、イギリス人女性の日本の奥地旅行という前代未聞の旅を実現へと導くきっかけになったと考えられる。

第二章 『日本奥地紀行』におけるバード

1. バードの二つの面

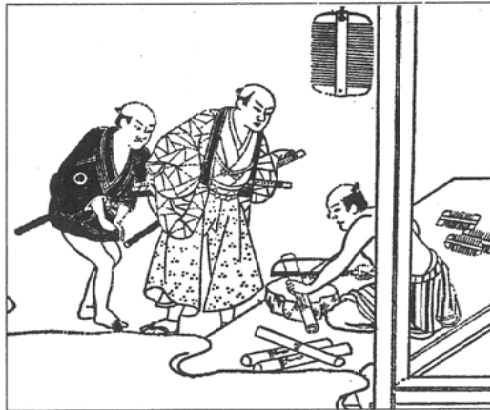
バードはそれまでに出版されていた『サンドイッチ諸島での六ヶ月』と『ロッキー山脈におけるある婦人の生活』(これらの紀行文は抜粋の形で雑誌に掲載されていた)によって、すでに旅行家兼作家としてある程度の評判を勝ち得ていた。日本に在住する英国人で、彼女の苦勞の多い乗馬旅行や登山の経験を記録した本を読んだ事のある人たちは、実際の彼女に会って、驚いただろう。彼女は小柄でずんぐりとした、澄んだ眼差しをした低い声の中年女性で、英国の牧師の長女として育ち、相応しい優雅で穏やかな態度をもつ人だったのだ。バードは、二つの面をもっている。一つは中流階級のキリスト教信者の女性であり、もう一つは世界の最果ての荒野への一人旅に憧れる、向こう見ずで精力的な冒険家としての面だ⁽⁸⁾。ここでは、このバードの二つの面を探るために、『日本奥地紀行』でのエピソードを二つ紹介したい。

一つ目は、バードが会津の車峠を訪れた時の話だ。彼女は、泊まった宿屋の亭主の小さな男の子の咳を自国の薬を使い和らげてあげた。するとそのうわさを聞きつけて集まってきた治療を施されていない人々の姿を目の当たりにする。

宿の亭主の小さな男の子は、とてもひどい咳で苦しんでいた。そこで私はクロロダイン⁽⁹⁾を数粒この子に飲ませたら、全て苦しみが和らいだ。治療の話しが朝早くから近所へ広まり、五時ごろまでには、ほとんどの村中の人たちが、私の部屋の外に集まってきた。(『日本奥地紀行』第12信より)

19世紀のイギリスでは、外科医ジョン・ハンターによって、人体の器官・臓器と病気の関係について理解が大幅に進んでいた。内科医エドワード・ジェンナーの功績によって、開業医はさまざまな病気の原因を体液のバランスや占星術に求めず、本当の原因をつきとめられるようになった。その他、天然痘のワクチンの発見、消毒薬、麻酔が使用されはじめた事などにより医療技術は確実に進展していた。また1700年から1825年の間には、イギリス全土で医師からきちんと治療を受けられる154の病院が新設された。しかし、それまでのイギリスの病院は貧民・狂人・酔っ払い・伝染患者が預けられるところで、患者は不衛生で混雑した環境の中で、ごく少数の医師たちから治療ではなく、世話をされるだけだった。政府は国民の健康には全く財源を配分しようとはしなかったのが、国民意識の高まりと貴族の財政援助のお陰でこれらの病院は造られたのだ⁽⁶⁾。

資料1 薩摩藩の職人の様子



木を切っているところ。

延草(1744～47)ごろの絵本より

出典：石田英輔、田中優子『大江戸生活体験事情』2002年、講談社。

このような社会で育ったバードの衛生観念や、医療の知識は、当時の日本人と比べるとずっと高かったことは間違いないだろう。そして咳で苦しんでいる子供を見て薬を差し出したバードの心境には、苦しんでいる人を ほっておけないという良心はもちろん、貴族の援助で病院が建てられるという社会を見てきたこともあるのかもしれない。初めにも書いたように、彼女は母親が名家の出身の婦人だったからだ。それは彼女がきちんとした薬を用いた事を見てもわかる。19世紀のイギリスでは商標によって製品名が守られ、さまざまな病気の治療に使われる「特許薬」が普及した。しかし、一般の咳止めには、「クロロサイン」などの化学薬品ではなく、サフラン酒を用いており、特許薬が広く使われるようになっても、一般の家庭ではそれぞれ自分で薬を手配する事が多かったからだ⁽⁷⁾。

またバードが旅する際、どこへ行っても、その風貌から日本人の興味の対象となってしまう。とくに奥地に行くほど、人びとの反応は大げさなものになっていく。以下は、車峠に住む人たちが、彼女を見たときの反応に対するバードの感想だ。ここでもバードが訪れると大人も子供も集まった。子供たちはバードが顔を向けると逃げ出してしまう。

群集は言いようもないほど不潔でむさくるしかった。ここに群がる子供達は、きびしい労働の運命をうけついで世に生まれ、親達と同じように、虫に食われ、税金のために貧窮の生活を送るであろう。彼らのおとなしい、裸で時代おくれの姿を見ていると、どうして貧乏人の子供が、かくも多くあふれるのか、と疑問が出てくる。(『日本奥地紀行』第12信より)

ここでバードは「裸で時代遅れの姿」と記している。実はこのすぐ後に、バードはこの地域の人々は「めったに着物を洗濯することなく、着物がどうやらもつまで、夜となく昼となく同じ物を着ている」とも書いている。当時の日本人は洗濯をして痛んで破れてしまうのを避けるために、頻りに着物を洗っていなかった。だいたい一年で一枚の割合で着破っていた。当時の着物は、山中から採ってきて作る麻や藤を原料にしている、一着を作るのに大体一ヶ月かかり、家族が五人いると五ヶ月も時間がかかる。着物を買える身分なら簡単だが、働いていてその上着物も作るとなると、とても大変だったため、労働の間少しでも着物を汚さないようにと、人々は裸同然の姿(資料1参照)になっていたのだ⁽⁸⁾。

資料2 農場で働く女性



出典：クリスティン・ヒューズ「十九世紀イギリスの日常生活」1999年、松柏社。

この様な日本人と比べて、当時のイギリスの国民の多くは数少ない上流階級の人々に後れをとらないようにしようと懸命で、あまり高くない生地ではあったが、彼らの着ていた服を真似ていた。非熟練労働者、産業労働者でも、流行の服は着ないまでも、動きやすさを重視した服は着ていた(資料2 参照)。これらイギリスの服は、日本のように自分で作るのではなく、バターを作って売ったり、上流階級のために、洋裁をしたり掃除をしたりしてお金を稼ぎ、買っていたものだった⁽⁷⁾。日本のように時間はかかるが買わなくても自分でお金をかけずに作れてしまう服がいいのか、お金はかかるが作る時間をかけずにすぐにも買える服がいいのかを判断するのは、着物と洋服の作りもまったく違うため難しい。少なくともパードは、着物を何度も洗ってはまた着る人々を色々な地方を訪ねて知っていた。だからこそこの地域の人々が夜も昼も同じ着物を着ていて、それによって皮膚病や蚤が大量に発生している事が我慢できなかったのだろう。

厳しい労働の運命を課せられていたのは、ヴィクトリア朝時代の労働者階級の人々、特に大勢の女性と子供の労働者も同じだった。彼らに対する過酷で、非人間的な労働は珍しい事ではなかった。子供は過密状態の工場で働かせられ、長時間労働、劣悪な食べ物と換気、過労によって、イングランドの労働者の間に熱病が大流行した。女性の労働者にしても、ポニー(小型の馬)を使うよりもポニーと同じく狭いところでも動き回れる女性を雇った方が安いと炭鉱で働かされた。この様な過酷な社会に対し、当時のイギリスではまだキリスト教が力を持っていて、聖書を絶えず手本にしていた真面目なキリスト教徒が多かったため、物事を運命としてあきらめる傾向が強かった。パードも夫がキリスト教徒で、自身も『奥地紀行』でよく聖書の言葉を引用していたのを見ると、とても真面目なキリスト教徒であったことがわかる。上記に抜粋した「きびしい労働の運命を受け継いで…」という言葉は彼女がキリスト教徒だったことに関係しているのだろう。

パードの持つ二つの面、それは、汚い服をきて、病気に苦しんでいる人々に薬を与え、このままではいけないと教え聞かせた、最果ての荒野への一人旅に憧れる向こう見ずで精神的な冒険家としての面と、中流階級のキリスト教信者の女性としての物の見方を持った面なのだ。

2. 女性としてのバード

今まで、バードの「イギリス人」としての目を通して当時の日本とを比較し、読み解いてきた。そこで以下では、当時のイギリス人「女性」の視点に絞り、「女性」としてのバードの立場から見ていきたいと思う。

また、「女性としてのバード」を見ていくうえで、バードと同じ時代に、同じく日本を旅行し、紀行文を書いたアーネスト・サトウの『日本旅行日記』⁽⁴⁾も用いてゆく。女性の目に映った日本と、アーネスト・サトウという男性の目に映った日本も読み解いていきたい。

女性としてのバードを見ていくうえで、当時のイギリス社会における女性の立場を説明する。

バードの生きたヴィクトリア朝時代は、産業が発達し経済的にも潤い、黄金時代とも言われたが、古くから残っている階級社会はそのまま受け継がれ、階級の違いによる生活レベルの差は埋まる事は無かった。特に労働者階級の人々の生活は人扱いされない厳しいものもあった⁽⁴⁾。

女性に注目しても、この階級により生活の水準が全く違っていた。バードのような中流階級の女性達の意識や、社会に求める女性としての願望と、低い地位にある女性の願望との間には大きな隔たりがあった。バードなどの中流階級の女性達が、オートクチュールのドレスを着こなし、エレガントな立ち居振る舞いを習得し、女性を「か弱い」「繊細な」「飾り立てる生き物」の典型として演出していた。一方下層階級のおびたしい数の女性は、炭鉱業から売春に至るまで、きつく、品位を落とす仕事に従事していた。そういった地位の低い女性達に、イギリスは大英帝国として発展していくための基礎を築いた工業の仕事に依存していた。彼女たち自身もまた、働く場所に不自由しない点から、自分達の立場に不満を言わなかった。その上、現代の日本人のキャリアウーマンが仕事にのめり込み、家庭を疎かにしがちなのに対して、彼女たちは家から出て外で働くが、帰宅すると相変わらず家事に責任を持ち、家庭に依存したままの生活を送っていた⁽⁴⁾。

では次に、バードが日本で出会った女性達との関わりを見て生きたい。バードは女性らしい感性で同性として、彼女たちを捉えている。まずは、バードが「あまり良くないもの」として感じた日本人女性の例を挙げたい。

どの女も背に赤ん坊を背負い、小さな子どももよろめきながら赤ん坊を負っていた。一人の女が泥酔してよろよろと歩いていた。伊藤は石の上に腰を下ろし、両手で顔を隠していた。気分でも悪いのかとたずねると、彼はとても悲しげな声で答えた。「どうしたらよいのかわかりません。あんなものを見られて、私はとても恥ずかしいのです!」この少年はまだ十八歳なのに。私は彼がかわいそうになった。私は彼に、日本では女が酔っ払う事が多いのか、とたずねた。横浜にはそういう女がいるが、普通は家の外に出ないのだ、と彼は行った。…(中略)…私はこの不潔で野蠻な姿を見て、これが私の聞いていた日本なのだろうかと思った。(『日本奥地紀行』第17信より)⁽⁵⁾

もちろん、世界の最先端をいっているイギリス人のバードでも好印象を持った女性もいた。次は、バードが「良い」として感じた日本人女性である。

これは大きな宿屋で、客が満員である。宿の女主人はまるぼちゃの可愛い好感をいだかせる未亡人で、丘をさらに登ったところに湯治客のための実に立派なホテルをもっている。彼女には十一人の子供がいる。その中の二、三人は背が高く、きれいで、やさしい娘達である。私が口に出して褒めると、一人は顔を赤く染めたが、まんざらでもないようで、私を丘の上に案内し、神社や浴場や、この実に魅力的な土地の宿屋をいくつか見せてくれた。

資料3 上ノ山の美しい女性



出典：イザベラ・バード『日本奥地紀行』高梨健吉訳、2000年、平凡社。

私は彼女の優美さと気転のきくのに全く感心する。(『日本奥地紀行』第18信より)

バードが全く違う印象を持ったこの女性達は、イギリス人の階級を通して見れば第17信の女性達が労働者階級、第18信の女性達が中流階級にあたるだろう。それまでにいくつかの国を旅行し、イギリス以外の国も見てきた彼女だが、古くから根付いている「階級から個人を見る」という見方からは、なかなか脱つることができなかったのではないだろうか。

前者を劣っていると思った気持ちも、後者を自分に近い身分に感じたのも、見た目の貧しさだけでなく、バード自身がその女性と一緒にいる時に感じた心地良さも反映されている。最初の地域の女性たちも、「良い」と感じた女性たちも着物の生地や質の良し悪しは書いてはいないが、スタイルは、子供も大人の女性も赤子をおぶっている(資料3参照)。それでもこれだけ違う印象をもったのは、バード自身が書いているように「不潔・野蛮」な女性と「優美・気転」を持つ女性との違いだろう。バードの感じるランクの高い女性とは、見た目はもちろんだが、それよりも内面からあふれ出る「教養」なのではないか。実際にバードは、日本人女性の事を「妖精のように働く」と述べている。この時の「働く」はイギリスの地位の低い人々が自分の命を削って働いていた炭鉱業や売春ではなく、中流階級の人々が自分自身を高めるために行っていた「教養」を身に付けるための「働き」である⁽⁶⁾。

「良い」と感じた宿屋の女達も伝統ある宿を世襲によって受け継ぐため、宿屋の主人となるべく言葉使い、立ち居振る舞いを家の中で教え込まれていたであろう。こうした家の中で教養を養い、家の中でしなくてはならないことがたくさんあるというのは、家の外の工場に働いているイギリスをはじめ、ヨーロッパにもないことで、これはバードが日本人の女は「妖精のように働く」事につながった。

こういった種類の女性たちと接する事は、中流階級の家庭に育ったバードにとっても一緒にいて心地良い人々だったのだ。育った環境は国を超えて双方に心地よさを与えるものとなる。

それを裏付けるものとして、バードが日本人の女性と関わったシーンをもう一つ取り上げたい。次の文は、バードが旅の前半で日光の金谷家に滞在していたときのものである。ここでバードは、日本の中流階級の家庭生活を見ることとなる。バードは自分と同じ生活レベルの人や

風景との初めての出会いをととても心地よく綴っている。

まずは、女性らしい感性がうかがえる風景に対する彼女の感想をこの本の中から拾っていききたい。

私が滞在している家について、どう書いてよいものか私にはわからない。これは、美しい日本の田園風景である。…(中略)…この静寂の中に、音楽的な水の音、鳥の鳴き声を聞くことは、本当に心をすがすがしくさせる。家は簡素ながらも一風変わった二階建てで、石垣を巡らした段庭上に建っており、人は石垣を上って来るのである。(中略)玄関も、私の部屋に通ずる階段も同じである。畳はあまりにきめ細かく白いので、靴下を履いていても、その上を歩くのが心配なくらいである。…(中略)…私は部屋がこんなに美しいものでなければよいのにと思うほどである。というのは、インクをこぼしたり、畳をざらざらにしたり、障子を破ったりはしまいかと、いつも気になるからである。(『日本奥地紀行』第7信より)

この様に、文化がまだ西洋化されていない日本の風景を彼女は心地よく受け入れている。ここからは風景や家にも興味を示し、それを考察したがる女性らしい好奇心と、その好奇心の中には、決して母国であるイギリスの文化だけを良いものと思わず、異国のものを見下して見ない、とても広い視野をもった人物を感じ取る事ができる。

また、人物では金谷家¹³⁾の夫人で、十二歳になるハルという女の子の母ユキと出会う。

ハルの母のユキは、魅力的なほど優美に話し、行動し、動き回る。夜とか、よくあることだが友人が午後のお茶に立ち寄るとかする場合を除いては、彼女はいつも家庭の仕事をしている。掃除、縫い物、料理、畑に野菜を植えたり、雑草を取ったりする。日本の女子は全て自分の着物を縫ったり作ったりする方法を覚える。(中略)貧乏でない家庭では、ユキのように、上に着るものと同じように簡素に造られた泡模様の縮緬の下着をつけている。たいていの村の場合と同じように、ここにも貸し出し図書館がある。晩になると、ユキもハルも、恋愛小説や昔の英雄女傑の物語を読む。(『日本奥地紀行』第10信より)

ここからも、彼女が美しさを豪華さや、西洋的なものではなく「教養」に求めている事がよくわかる。ただ楽をしている事が豊かさにつながるわけではなく、自ら行動し、教養を身に付けるユキの姿勢に彼女は生活のゆとりと、美しさを感じたのだ。

次に同じ時期に日本を訪れていたイギリス人男性のアーネスト・サトウの書いた文章を引用し、女性としてのパードを浮き彫りにしていきたい。

アーネスト・サトウは日本通とされる人びとの中で認められた名士であり、ナイトの爵位を授与されている。パードが日本を訪れた時期には英国公使館で日本語書記官として日本に滞在していた。彼の著作である『日本旅行日記』は、サトウが28歳の1871年から1882年、39歳までおよそ31回にわたって日本国内を旅行したときの日記をまとめたものだ¹⁴⁾。

これを読むと、サトウの文章はパードの主観的な文章の書き方と違い、ほとんどが数字や説明など、記録をつけているような内容で、その時の情景を思い描けるような想像力をかきたてられる記述はない。同じ時代に同じ土地を訪れた二人の紀行文を比べてみよう。

まずは、新潟を訪れた時のサトウの文だ。

午前五時半の気温は六十度〔摂氏十八度〕。荷物用の人力車を雇い、関〔塩沢町〕まで五十銭でやってもらう事にした。主人は距離は七里で一里八銭というが、実際は五里二十二町で、運賃表では一里につき六銭半だから車夫は約十六銭を取りすぎることになる。私は歩

いた。(アーネスト・サトウ『日本旅行日記1』p.161より)

次にバードの新潟での紀行文を抜粋する。

私は、新潟で一週間以上過ごしてきたが、残念ながら明日は出発する。残念と言うのは、町に興味があるからではなく、友人ができたからである。この一週間ほどいやな天気を経験した事はない。太陽は一度だけ顔を出したが、三十マイル離れている山々は少しも姿を見せなかった。雲は茶色がかったねずみ色をしており、空気はどんよりとして湿っぽく、日中の温度は八十二度で夜は八十度に下がる。家中がみな身体はだるく、食欲不振に悩まされる。夕方になっても涼しくならず、無数の虫が、飛んだりはったり、はねたり、走ったりする。(『日本奥地紀行』第16信より)

このように二つの文を読み比べてみると、バードの書いた文章の方は、天気のに食わなさや、虫の邪魔くささなど、常にバード自身の立場から書かれていて、バードのその時の感情が主となっている。これは、『奥地紀行』第七信の金谷邸で見た日本の景色に感動した文章を見てもわかる。彼女はいつも自分の見たままの風景を文章に書き記す事ができた。そこからは彼女の文才はもちろん、彼女の視野の広さも窺える。

そして、もう一つ注目したいのは、単位の違いである。サトウは、日本の単位を使っているのに対し、バードはイギリスの単位のままだ。これは、サトウが旅に出る始めから日本語が堪能であるのに対し、バードは日本語が全くできないまま通訳一人を連れて旅に出たという理由もある。しかしサトウの場合は、彼自身が、自分の書き残すものは、たとえ日記でさえも今後のイギリスや日本にとって、とても重要なものになると考えていたことにもよると思われる。事実、自分の名が歴史に残る事を少なからず意識していたとみえ、死に際しては膨大な数の日記類や私的な所管類を国立公文書館に寄贈している⁽⁴⁾。そのため、自分の心情よりも、もっと貴重な資料となるような数字的なデータを、彼が資料を提出する日本の単位を基準として、書き残したのではないか。

このような一方的な資料の提供や、調査は、当時のイギリス人の全てに言える考え方に基いている事で、サトウだけでなく当時イギリスの人々は、「世界でもっとも豊かな国なのだから、他の後進国(この場合は日本)の無知な貧乏人を啓蒙してあげなくては行けない。私達が彼らに払っているお金は、そのための恩金なのだ。」というような思想を後進国に対し持っていた。こうした、弱いものを保護してやるとする家父長主義のイメージが、身分上下問わずこの時代のイギリスの、かなりの人たちの頭の中にあっただ⁽⁵⁾。

アーネスト・サトウの行動は、まさしくこれに当てはまる。ただでさえ日本国で有利な立場を持っている彼が、こうした帝国主義的な考えを持つのは自然な事だったのだろう。

バードがサトウのようにならなかったのは、彼女が女性だったからではないか。この時代イギリスの女性の立場は複雑だった。当時のイギリス人女性たちは中流階級のものならその身を飾り立て、女性のか弱い、繊細な面をアピールして、これまで通り家の中で男の命令に従い、自分が女性だということに酔いしれていればよかった。しかし、下層階級の女性はイギリスの一国民として働き、工業化の発展に貢献していた。ここから女性の社会進出が始まると思われるのだが、実際には、工業化によって社会に進出していくはずだった女性の希望は見事に打ち砕かれる。彼女たちは家の外では工場で働き、社会的な貢献をしていたが、家に帰れば重要な決定権はすべて家長である父が下し、下位の成員が従順にうやうやしくそれを受け入れるという、古い体質のままだった。こうしたいつまでも変わらないヴィクトリア朝の女性劣勢の社会

体制は、これから社会に進出し、政治と社会への期待を膨らませていたどの階層の女性たちの期待と要求をもしばませてしまったのだ⁽⁴⁾。

この二人の文章の違いは、まさに当時の女性と男性との社会的地位の差を象徴しているように思われる。アーネスト・サトウは自分の行動を、日記をつけることでさえも日本にとって重要なことと考え、そうしたことに使命感を持っていた。男性であったサトウは、自分の仕事の立場からも、「国のために」と考えられることができた。しかしその考えのために、サトウにとっては日本が「調査の対象」でしかなかった。それにより、彼の紀行文は数字の羅列だけにとどまってしまい、そこからは、生き生きとした当時の日本を感じ取ることは難しい。

バードにとっての日本は、健康回復のための旅行という「個人的なもの」で、本の内容も妹への旅の報告の手紙を元に書かれている。それは、世界のどの国よりも発展していた大英帝国の時代であっても、まだ女性が自分の存在や、行動が社会に影響を及ぼすものだと考えもつかない時代だったからなのだろう。そのお陰で、現在私たちは飾られていない彼女の文章から、当時の日本を読むことができる。適度にリラックスした状況だったからこそ、彼女の洞察力の鋭さがより発揮されて、サトウとは違った視点からの感情豊かな作品となったのだろう。

3. 北海道に渡ったバードの変化

これまでは主に、バードの横浜から青森までの日本人の生活や、土地の状態を、イギリスと比較して見てきた。本節は、当時未開拓の土地であった「北海道」と、そこに住む「アイヌ」の人々とバードとの交流を見ていきたい。今までとは異なる土地と人々との関わりの中で、バードはどんな反応を見せたのだろうか。

バードは北海道の手付かずの自然に感動し、アイヌの人々と交流する。この地で彼らと過ごした旅はとても充実していたのか、本土と同じくらいの枚数で、北海道での出来事を綴っている。しかし、アイヌといえば、昔からその異なった容貌や文化、言葉を持つことで差別されつづけてきた民族であり、明治になってからは、政府が北海道の開拓に力をいれ、アイヌの人々に対する差別が一層激しくなった時だった。明治政府は、札幌に「開拓使庁」を開設し、和人⁽⁵⁾の姓名を強要した上に、アイヌの習俗を禁止し、アイヌの和人化を計り、アイヌの占領地を「無主地」として官有化した。バードが訪れたこの年も、戸籍上のアイヌの呼称を「旧土人」に統一するなどアイヌの人々にとって辛い時期だった⁽⁶⁾。

このような時代にバードはアイヌの人々と出会ったのだが、これまでと同様に、彼女はアイヌ民族を蔑んだり、差別の目で見るということにはなかった。以下はアイヌの人々に対する賞賛部分を抜粋したものだ。

- (1) 私はその(アイヌの男性)顔形といい、表情と言い、これほど美しい顔を見たことがないように思う。高貴で悲しげな、うっとり夢見るような、柔和で知的な顔つきをしている。(『日本奥地紀行』第35信より)
- (2) 彼(アイヌの男性)の態度は極めて上品で、アイヌ語も日本語も話す。その低い音楽的な調子はアイヌ人の話し方の特徴である。これらのアイヌ人は決して着物を脱がないで、大変暑いときには片肌を脱いだり、双肌を脱いだりするだけである。(『日本奥地紀行』第35信より)
- (3) わが西洋の大都会に何千と言う墮落した大衆がいる。彼らはキリスト教徒として生まれて、洗礼を受け、クリスチャン・ネームをもらい、最後には聖なる墓地に葬られるが、アイヌの人の方がずっと高度で、ずっと立派な生活を送っている。全体的に見るならば、アイヌ

人は純潔であり、他人に対して親切であり、正直で崇敬の念が厚く、老人に対して思いやりがある。(『日本奥地紀行』第37信より)

- (4) 彼らは文明化できない未開人である。それにもかかわらず、彼らは魅力的で、私の心を強くひきつけるものがある。彼らの低くて美しい声の音楽を、彼らの穏やかな茶色の眼の柔らかな光を、彼らの微笑の素晴らしい美しさを、私は決して忘れる事はあるまいと思う。

(イザベラ・バード『日本奥地紀行』第37信より)

この様に、様々な表現を使ってアイヌの人々を賞賛している。

なぜ、バードはどの土地に行っても先入観なしに人々を見ることができたのだろうか。その理由はいくつもあげられると思うが、まず一つ目は、日本が「外国」だった事があるのではないか。自分の国でない分、そこに住んでいる人々のことも、客観的に見ることができたのかもしれない。

私達が海外旅行や、留学をした時の事を思い出してほしい。自分の国を離れて、気持ちも自由に気分がいい。また、知らない国のこと全てが新鮮に目に映る。そのため、ほとんどのことが、先入観のない状態で、自分の気分も良いので、良いイメージで受け取られる。バードも知らない日本という国で、この様な感覚を持っていたのだろう。それが、自国のバードと同じ宗教の人々と、比べている(3)のような文章に表れていると思う。またそれは、彼女が同じヨーロッパ人に対して思う気持ちと比較する事でわかってくる。バードは同じく北海道旅行を計画している外国人に出会った折の感想を以下のように記している。

彼らフランス公使館のディースパッハ伯爵、オーストリア公使館のフォン・シーボルト氏、オーストリア陸軍のクライトネル中尉は、食糧や赤葡萄酒をふんだんに用意しているが、とても多くの駄馬を連れて行くので、その旅行は失敗に終わることを私は予言する。しかし私の方は荷物を四五ポンドに減らしているから、成功は、疑いない。私は長い間計画してきた旅行に出発したいと思う。私は経験をつんだ旅行家の自信を持って、一人で計画してきた。私はこの旅行を非常に楽しみにしている。(『日本奥地紀行』第34信より)

このように、ヨーロッパ人に対する彼女の気持ちは、日本人に対しての態度と比べるとシビアに感じる。旅行先で和やかに過ごしていた彼女が彼らを見たとき、現実に戻され多様な感じを受ける。やはり彼女にとって日本は旅先の外国だからやや大きな心で受け止めていたのだ。しかし、バードは4月から12月までの約八ヶ月の長旅をして、たくさんの日本人とも交流している。新鮮な気持ちだけで全てを良いイメージと捉えられたのは、やはりバードの人柄だろう。

そこでここでは、バードの人柄を考えてみたい。前回バードが日本人の女性に対し、良い印象を持つとき、彼女が何に共感し、良いと思ったのかを考えてみた。「バードと一緒にいて心地の良い女性とは、見た目はもちろんだが、それよりも内面からあふれ出る「教養」だったのではないか。」これがその時の答えだったが、今回のアイヌの人々に関する(2)の彼らの言葉の知識や、いわゆる「和人」が、いつも裸で仕事をしていたのに対し、暑いときでも片肌くらいしか服を脱がない彼らの紳士的な態度に惹かれて書かれている部分を読んでも、彼女の見方は変わっていないと思う。

また、彼女が片肌を見せないアイヌの人々に好感を抱いたという場面は同時に彼女がイギリス人だという事を改めて感じさせる。彼女は、人が裸でうろろしているのを好まない。当時の日本人は裸で過ごしている人の割合が多かった(資料1参照)。それに比べて、イギリスでは

労働階級でも服は身に付けている(資料2参照)。この裸を「恥かしい」と感じる彼女にとって、アイヌの人々は彼女が『日本奥地紀行』で表現しているように、「毛深いのがこの民族の目立った特徴だった(第40信より)」。それゆえに「肌のすべすべした日本人(第40信より)」よりも肌を露出していても目立たない。バードがより安心してアイヌの人々とスムーズに交流できたのはこの辺りに原因があるのではないだろうか。これはバードのイギリス人としての羞恥心がとてもよく感じ取れる部分である。

羞恥心に関してはイギリス人女性らしさを感じさせたバードだが、彼女が「良い」と感じる人々の人柄は、現代の私でも共感できるものばかりだ。国や文化、時代を超えて人として大切な事を彼女はいつも「良い」と捉えている。彼女は人にとって何が大切なのかわかっていたのだ。その事は、彼女の幼い頃からの家庭環境からみてとれる。

彼女の父親は、牧師であったし、叔父の多くも牧師や宣教師などの「知識階級」であった。こうしたほとんど大人の、それも知識人の中でバードは教育されてきた。また、実際に父が聖職者と言う事で、幼い時から転々と居住地を変えることで、いろいろな地域を見て、経験においても人としての道徳を学びやすい環境にあった。そのことが、『日本奥地紀行』で随所に見られるような彼女の素直な人柄に表れているのだ。

そんなバードとは反対に、一緒に旅をしていた伊藤という日本人の通訳は、「アイヌ人に対して親切に優しくすることがいかに大切かを伊藤に日本語で通訳してほしい」と求めたバードに対し、「アイヌ人を丁寧扱うなんて！ 彼らはただの犬です。人間ではありません。」と言ってアイヌ人について村からかき集めた悪い噂を残らずバードに話した。しかし、この伊藤の発言に対しバードは気にする事もなく、自分自身のアイヌの人との関わりの中で彼らに好意をもち続けた。

特に第41信の彼女の言葉からは、伊藤を始めとする当時の日本人のアイヌ人に対する偏見に惑わされていない。自分の体験から物事をまっすぐに判断できる彼女の旅は、始まってから変わることがない。

彼らが自分の子供たちに対する愛情の深さは、特に目立っていた。彼らは子供を優しく抱き、自慢げに高く差し出して見せたりした。私とその褐色の肌の黒い眼をした愛くるしい子どもたちを褒めている、と宿の主人が彼らに告げると、彼らは顔を輝かして喜び、何度も私にお辞儀をくり返した。他のアイヌ人と同じようにこれらのアイヌ人も、不愉快な事があると短い金切り声を発する。(イザベラ・バード『日本奥地紀行』第41信より)

このように子供を可愛がる様子から、アイヌ人の人間らしさが伝わり、礼儀正しさが何度も繰り返すお辞儀から理解している。そして「不愉快な事」があって始めて彼らは短い金切り声を発すると書く。不愉快な事があるアクションを起こすのは人なら当たり前の事である。当時、野蛮人だとアイヌ人達を差別していた日本人の態度は、まさに彼らにとって不愉快な事であり、怒るのももっともな事だと書いている。

北海道の旅は、日本奥地紀行の終着点となっている。この北海道の旅は、バードがその後『中国奥地紀行』⁽⁴⁾で見せるような国を背負った旅行家になっていく過程で1つのポイントになっていると思う。先ほど同じ北海道旅行に旅立とうとしているヨーロッパ人へのバードの気持ちを紹介したが、この同じ文章からは、初めて日光から北へと長い本土の旅を打破してきた自信がうかがえる。前にこの時代の女性は、男性と比べて低い立場にあったと述べたが、そんな中、伯爵や、中尉といった地位のある男性の旅を失敗に終わると断言し、自分は成功すると述

べているのがその証拠だろう。

この時点で、旅はもう健康回復の手段ではなく、立派な生きがいになっていたのではないだろうか。この頃には「療養のため…」といった台詞はほとんどなくなり、書かれているのは、新たな土地への期待だけだ。彼女自身も気がつかないうちに、本来の目的よりも、ただ単純に旅を楽しむ始めたのではないだろうか。旅の楽しさの虜になり、この旅行での自信と経験がバード自身に、単なる「旅人」ではなく、立派な「旅行家」と意識させた。この約五ヶ月の旅行だけでも彼女の心の中はこんなにも変化をしている。バードはこれまでも、この後も様々な国を旅している。次の章ではその中で変化していく彼女の気持ちを追っていききたい。

第三章 『日本奥地紀行』執筆の以前と以後の変化

1. 『中国奥地紀行』におけるバード

今まで私は世界の最先端をいくイギリスから来日したバードという女性が、大きな文化・生活水準のギャップの中でも文化の違いを指摘はしても、それが劣っているという言い方はせず、常に広い視野で物事を捉えるという、その人間性・才能に注目してきた。しかし、次の『中国奥地紀行』のバードは、今まで注目してきた彼女の目が少し濁ってしまったように感じた。ここでは、『日本奥地紀行』と『中国奥地紀行』を、それぞれの文章の中で彼女が何を批判し、肯定したのかに注目して読み解いていきたい。

両書を比べてみると、彼女が注目している点や、批判、肯定している部分にかなりの違いが見える。バードがそれぞれの本の中で初めに紹介している事柄に注目してみたい。まず『日本奥地紀行』の第一信で書いている事はこうである。

日本の海岸線は実に魅力的だということだが、この日の海岸は、色彩も形状も、少しも目を驚かすものがなかった…(中略)…甲板では、しきりに富士山を賛美する声があるので、富士山はどこかと長い間探してみたが、どこにも見えなかった。地上ではなく、ふと天井を見上げると、思いがけぬ遠くの空高く、巨大な円錐形の山を見た。白雪をいただき、素晴らしい曲線を描いてそびえていた。その青白い姿は、うっすらと青い空の中に浮かび、その麓や周囲の丘は、薄ねずみ色の霞に包まれていた。それは素晴らしい眺めであったが、まもなく幻のように消えた。(『日本奥地紀行』の第一信より)

富士山は日本人にとっても特別な山である。今では誰もが登れる山となっているが、かつては強い信仰の対象となっていた。中世の文学には富士山を見るために旅をした紀行文も残っていた。またその美しい円錐形のフォルムは今でも日本人に愛され、尊敬や誇りの気持ちはとても強いといえる⁽⁸⁾。

富士山を愛した日本人の美学と、イザベラ・バードというイギリス人女性の美的感覚や、良い物を良しとする感覚は、基本的には同じだった⁽⁸⁾。彼女が感じた富士山に対する感じ方には、日本人と共通するものがあつた。ここから言える事は、彼女はイギリス人の女性だったが、良い物を感じる気持ちは一緒であり、私達日本人の立場からも彼女が良いと思ったものに共感する事ができる。そこで『中国奥地紀行』の中で彼女が紹介している内容に、私達の感覚と比較しても違和感を感じる部分があれば、そこから彼女の変化を感じ取る事ができる。その事も彼女の変化を知るための手がかりの一つとして捉えていきたい。

バードは景色だけでなく人間に関しての記述も見たままを書いている。これは小さな船の船頭についての記述である。

資料4 江戸・両国橋の舟遊び



男女全員がまったく違う模様の着物を着ている。

『絵本家賀御伽』より

出典：石田英輔、田中優子『大江戸生活体験事情』2002年、講談社。

彼らはみな単衣の袖のゆったりとした紺の短い木綿着をまとい、腰のところは帯でしめていない。草履をはいているが、親指と他の指との間に紐をとおしてある。頭の被り物と言えば、青い木綿の束(手拭い)を額の周りに結んでいるだけである。その一枚の着物も、ほんの申しわけに過ぎない着物で、やせ凹んだ胸と、やせた手足の筋肉をあらわに見せている。皮膚はととも黄色で、べったりと怪獣の入れ墨をしている者が多い。(『日本奥地紀行』の第1信より)

たしかにこの文を見ると、「やせ凹んだ胸」「申しわけに過ぎない着物」はあまりよい印象を与える事はないが、実際に江戸時代の船頭の絵を見てみると、そこに描かれている船頭はほとんど裸同然で船をこいでいる(資料4参照)。バードは日本に対し悪い印象を与えようと、意図的にこの様にマイナスの表現をしているのではなく、実際に当時の船頭たちはバードが見たような格好で働いていたのだろう。

次は『中国奥地紀行』の第一章を紹介したい。中国編では、第一章に入る前に「中国の地理と序論」として、中国の地形や人口などを、まるで地理学者のように事細かに説明している。

まず、面積はフランスにほぼ等しい。また、人口は中国の人口統計機関によると七千万人と推定され、五千万人よりも少ないことはないといわれる。気候は温帯的ないし亜熱帯的ですばらしい。土壌は肥沃で、多くの所では、周到な工作によって、三毛作はおろか四毛作も可能である。森林面積は定かではないものの、大木の茂る森林もある。鉱物資源も豊かで、炭田には良質炭を生産する世界有数の広大なものもある。(『中国奥地紀行』第一章より)

ここでは日本編で見られたような自然の風景に関する記述がほとんどない。内容の全てが中国の土地や自然などで、紀行文というよりは「中国」という国の紹介になっている。

『日本奥地紀行』は妹にあてた手紙を編集したものであって、異国の紹介というよりは自分の体験の報告になっているが、この中国編はまるで大英帝国の地理学者がイギリスの国益のために女王からおおせつかって中国を調査しているようだ。

また、中国編では日本編には見られなかった中国の人々を全員まとめて「中国人というのは

こんな人達だ」という表現が多い。例えば中国人の事を以下のように表現している部分がある。中国人は独自の慣習を持っている。その特徴は他のどの民族のものとも異なる。我々を導く情熱や思考方法によっては、中国人が目標とするものには到達できない。中国人は明敏でもあるが保守的で、何事についてもすぐに感化されると言う事がない。商売の際には舌を巻いてしまう。生まれながらの商売人である。(中略)

中国人は無学であるし、信じがたいほど迷信深い。だが、概していえば、いろいろな欠点はあるにしろ、ひたむきさという点では他の東洋民族にはないものがあるように思われる。(『中国奥地紀行』第一章より)

『日本奥地紀行』ではバードの会った色々な職業を持った人々、色々な生活レベルの人々、アイヌの人々が、代表的な日本人としてではなく、一個人として生き生きと描かれていた。それが、この中国編では、その冒頭に中国には、漢民族だけでなく西蕃族、蛮子、羅羅族などがあると書いているにもかかわらず、説明をする時は「中国人」としてすべてをまとめている。中国編には個人のかかわりは記述されていない。あるのは、中国を動かすための仕事をしている官吏⁰⁸の仕事の内容とこなしただけである。

また、私はバードの説明から、日清戦争後の日本人の中国進出の時に「中国人の慣習や国民性を知らなくては中国では何にもできない。」として出版された『支那の国民性の色々』(長野朗書、三笠書房、昭和13年、戦時版)という本を思い出した。

この本の中では日本の方が優れているから、劣っている国の文化を理解できるという視点から、中国人とはこんな人だと言う説明を色々書いている⁰⁹。バードは、中国人をひとまとめにして書くことにより、戦時中の日本のように、大英帝国の中国進出にとって都合の良い書き方をしたのではないだろうか。ここでの彼女は一人の向こう見ずな旅人ではなく、大英帝国の使命を負った学者のような存在になってしまっていたのではないだろうか。

2. 旅行家から探検家へ

個人としての旅行家か、国を背負った名誉ある探検家か、次はバードがこの二つの全く異なる存在になるに至った理由を彼女の人生から見ていきたい。

注目したいのは、『日本奥地紀行』と『中国奥地紀行』の書かれた年代と、その時のバードの状況である。

『日本奥地紀行』は1878年6月から9月にかけての三ヶ月の日本旅行中に彼女が妹にあてた手紙をもとにしている。この本は『英国女性から見たアメリカ』『ハワイ諸島の六ヶ月間』『一婦人のロッキー山脈生活』に続く、イザベラ・バード四冊目の紀行文だった。これらの本により、彼女は旅行家兼作家としての評判を勝ち得ていた。しかし、これらの本の基となった旅行の全ては、医者から健康回復のためと進められたことをきっかけとしており、地理学の研究者や探検家といった肩書きなどはない。イギリスの中流階級の一女性として異国へ出向き、素人として書いたものだった。

しかし『日本奥地紀行』は発売後一ヶ月で3版を重ね、新聞でも絶賛されることとなり、これを機に、バードの旅行の仕方は変わってくる。この本の成功と自信、そしてその後の夫の死からイザベラ・バードという中流階級の女性が、一人の探検家、あるいは地理学者として誕生したのだと私は考える。

バードは『日本奥地紀行』を出版した翌年3月にビショップ博士と結婚した。結婚をして生

活を落ち着けざるをえなかったのか、結婚生活の間、1883年に『マレー半島紀行』を出版しただけだった。しかし、1886年に博士が病死すると、落ち着いた生活は一変し、その三年後にペルシャとチベットを旅行するために一年間旅立った。

彼女の旅行の変化はここから見る事ができる。バードは1889年3月、当時イギリスの植民地であったインドに到着。その後、行く土地ごとに医療伝道のためと言い、亡き夫や妹を記念して病院を建設した。その後1890年1月、キャラバン隊を組織してペルシャに入った。日本では、伊藤という通訳をたった一人連れて旅をしていたバードが、キャラバン隊を組織するほどになり、医療伝道と言った宣教活動めいた行動²⁰をとるようになった。確かに、59歳の彼女が一人で一年という長い旅をするのは大変だったかもしれない。宣教活動についても、バードの父親は牧師であったし、それまでの紀行文の中でも聖書の言葉を引用し、薬を分け与える場面の描写はあった。しかし、全てが1889年のように大々的な旅ではなかったはずだ。この時点で、彼女はそれまでの個人の療養のための旅行ではない、本格的な冒険をすることに目覚めたのではないだろうか。彼女が個人的な旅行ではなく、周りの人を巻き込むくらい大きな旅を求めたことは「キャラバン隊」や「医療の伝道」といった言葉から推測する事ができると思う。

そしてこの女性探検家は、英国地理学会の特別会員に選ばれたことにより、大英帝国の地理学者への道を歩んでいくこととなる。

バードは1893年にスコットランド地理学会特別会員に推される。そして、1893年、バードが62歳の時に、ヴィクトリア女王に謁見し、英国地理学会(Royal Geographical Society)の特別会員に選ばれた。これによってバードはそれまでの向こう見ず女性探検家から地理学の専門家となったのだ。

そして、この地理学こそ、大英帝国に必要な植民地を確保するうえで重要な学問となる。ヴィクトリア女王に謁見し、イギリスを繁栄させようという使命に目覚めたことから、『日本奥地紀行』の中で見られた表現や評価のあり方を捨てたのだろうか。女王に会い、国の任務を負っているという責任感から、偏った評価を書いたのだろうか。こうした評価はその後彼女が書いたほかの紀行文を読んでみないとわからない。

しかし、ヴィクトリア女王との謁見と、地理学会の特別会員に選ばれた時から、それまでの自分のための旅行から、イギリスという国を意識し始めた旅行になったことには間違いはない。

女王との謁見の翌年バードは極東へと旅立ち、カナダを經由して日本、朝鮮、中国²¹を旅する。その翌年の1895年1月には再び朝鮮を訪れ、さらに日本で休養した後、『中国奥地紀行』を書く端緒となった上海旅行へと出掛ける。この『中国奥地紀行』の時、それ以前に旅をしたペルシャや朝鮮と比べている部分がある²²。彼女の経験が増え、色々な知識が経験によって身につけていることがわかる。そして、1898年1月『朝鮮とその隣国』を出版し、1899年11月に『揚子江とその奥地』(邦題『中国奥地紀行』)を出版した。この時バード68才である。1901年には六ヶ月にわたりモロッコを旅し、1904年10月7日に病気で亡くなった。享年72才だった。

このように二つの紀行文の中でバードが注目して記していたものは全く違うものだった。中国の場合は人口など数字的なもの、日本は富士山の美しさなどバード自身の主観的なものが中心にまとめられてある。『中国奥地紀行』で見られるバードの文章は当時大英帝国の代表として、自らの文章の及ばず影響を予期していたアーネスト・サトウの文章に驚くほど似ている。

Ⅲ 終章

これまで、現在ほど国同士が身近ではなかった時代に、先進国から文明開化直後の日本を訪れた、バードというイギリスの中流階級の女性の異文化体験を通して、そこに起こる文化間のギャップや、共感した部分を取り上げてきた。バードが『日本奥地紀行』で見せた様々な感情は、彼女のまっすぐで偏見のない物事に対する見方を教えてくれた。彼女の目はとても清らかで、そんなバードは自らの体験の中から異国の風景を自分の心情を交えて、実に感情豊かに文章に表現している。

しかし時代が変わり、イギリスの地理学会に選ばれるなどして彼女自身の環境も変化していくと、澄んでいてまっすぐだった彼女の目はしだいに曇りだしてきた。旅行地のことを調査の対象という眼でしか見なくなり、旅行の目的もイギリスの国益のための調査が主となっていった。『中国奥地紀行』では大英帝国の地理学者になりきり、まさに国に渡すためのデーターといった文体にもなっている。こうなった文章からは、もう『日本奥地紀行』に見られたような、土地の人びととの係わり合いから生まれる感情や、景色に感動した心境は伝わってこない。文化のギャップも自分の国との違いを比較し、見下すための材料として使っているようで、とても冷たい文章に感じる。

異文化を持ったもの同士が触れ合う際には、必ず摩擦が生じ、問題も起こってくる。それは、どんなに世界が小さく、身近になってもなくなる。私の隣にいる人は自分とは違う人生を歩んできた、異文化を持っている人なのだ。自分の持っている文化と違う文化と接する時は、先入観で見るとはやめて、同じ立場から相手を受け入れる事が大切だ。どちらが優位にいても劣っていても人の付き合いは上手くはいかない。世界はどんどん小さく、身近になってきている今、私たちに大切なのは『日本奥地紀行』でバードが見せた対等の立場で相手を受け入れる事であろう。私は改めてこれらの事を、今から約170年前の時代を生きた女性から教わった。

註

- (1)アーネスト・メイスン・サトウは日本通の中で初めて世界で認められた名士。『日本旅行日記』は、アーネスト・サトウが日本内陸旅行に関わる日記の中からいくつかを取り上げ訳出したもの。
- (2)イザベラ・バード『日本奥地紀行』高梨健吉訳、2000年、平凡社。
- (3)小池滋『島国の世紀ーヴィクトリア朝英国と日本ー』1988年、文芸春秋。
- (4)D・トンプソン『階級・ジェンダー・ネイション』1992年、平凡社。
- (5)本名は伊藤鶴吉(1085-1913)。神奈川県に生まれ、横浜で外国人から英語を習い通訳となる。(「近代日本人の肖像より」<http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/11.html>)
- (6)W.J.リーダー『英国生活物語』1983年、晶文社。
- (7)クリスティン・ヒューズ『十九世紀イギリスの日常生活』1999年、株式会社松柏社。
- (8)宮本常一『イザベラ・バードの「日本奥地紀行」を読む』2002年、平凡社。
- (9)パット・バー『英国と日本ー日英交流人物列伝』2002年、博物館新社。
- (10)抗生物質だと思われる。
- (11)アーネスト・サトウ『日本旅行日記1』庄田元男訳、1992年、平凡社。
- (12)バードの訪れたこの地域は、バードが休息できるような清潔な家はなく、子供もたちは、しらくも頭に疥癬で目は赤くはれ、女性はもちろん、小さな子供もよろめきながら赤ん坊を背負っていた。とても貧しい地域だったのである。

- (13)金谷家の主人は当時、入町(イリミチ)村の村長を勤めていた。その他に神社の楽人の指揮を務め、薬も調合できた人物である。
- (14)コータツツィ、ダニエル編『英国と日本—架け橋の人々—』1998年、思文閣出版。
- (15)「和人」という言葉は、徳川幕府の時代、アイヌ民族の和風化を推進する文章に登場するのが公的使用の始まり。意味は、「幕府体制を維持する人」のことで、「和人」の表現は、近代以降主として北海道内で歴史用語として使用されてきた。
- (16)小笠原信之『アイヌ差別問題読本』1997年、緑風出版。
- (17)イザベラ・バード『中国奥地紀行』2002年、平凡社。
- (18)官吏とは…彼らの仕事は実にさまざまで、行政・財務・司法、時には軍事にさえ及んだ。彼らは自らの管轄区域の税だけでなく、治安と平穏までも保たねばならなかった。
- (19)例えば、挨拶の仕方の説明はこうである。「日本は雨が多いために天気を気にした挨拶をするが、中国人の場合は良い天気ばかりなので、天気を気にした挨拶よりも、昔から戦争の多い中国では戦乱のため食を得る事が困難であったから、「飯を食ったか?」と言う事が挨拶になっている」とか、「中国人は悪い事をしてしても白状せず、黙ってしまう時は白状した事になる。そして、責めてはいけない。責めてしまうと、認めたのになぜ攻めるのかと逆襲されてしまう。」などというものがある。(『支那の国民性の色々』より。長野朗、三笠書房、昭和13年、戦時版)。
- (20)教育・医療・貧民救済などの仕事は、キリスト教伝道の為のステーションとも考えられる為。
- (21)この年の中国旅行はバードが『中国奥地紀行』を書いたものではない。本の基となった旅は、1896年1月。揚子江を船で遡り、五ヶ月間に渡って中国西部を旅行する。六月に上海に帰り、その後日本で静養。バード65歳の時。
- (22)中国の「官吏」は朝鮮の「ヤーマン」と比べ、大勢の薄汚い役人が何もせずにぶらぶらしているといった事はなかったと述べている部分がある。(『中国奥地紀行』第二十三章より)

参考文献

- イザベラ・バード『日本奥地紀行』高梨健吉訳、2000年、平凡社。
- 宮本常一『イザベラ・バードの「日本奥地紀行」を読む』2002年、平凡社。
- クリスティン・ヒューズ『十九世紀イギリスの日常生活』1999年、松柏社。
- W.J.リーダー『英国生活物語』1983年、晶文社。
- コータツツィ、ダニエル『英国と日本—架け橋の人々—』1998年、思文閣出版。
- D.トンプソン『階級・ジェンダー・ネイション』1992年、平凡社。
- 小池滋著『島国の世紀—ヴィクトリア朝英国と日本—』1988年、文芸春秋。
- パット・バー『英国と日本—日英交流人物列伝』2002年、博物館新社。
- イザベラ・バード『中国奥地紀行』2002年、平凡社。
- 小笠原信之『アイヌ差別問題読本』1997年、緑風出版。
- 長野朗『支那の国民性の色々』昭和13年、三笠書房、戦時版。
- アーネスト・サトウ『日本旅行日記1』庄田元男訳著、1992年、平凡社。
- デヴィッド・スーデン『図説ヴィクトリア時代イギリスの田園生活』1997年、東洋書林。
- 村岡賢治、川北捻『イギリス近代史(改訂版)—宗教改革から現代まで—』1986年、ミネルヴァ書房。
- 石田英輔、田中優子著『大江戸生活体験事情』2002年、講談社。

(卒業論文指導教員 神田より子)